

# 授業をつくる第一歩は「自分への問いかけ」から

東京都港区立赤坂中学校教諭  
甲斐利恵子



Q

先日、「少年の日の思い出」の授業をしました。初発の感想を書かせることから始め、場面を押さえたり、構成を考えさせたりしたあと、登場人物同士の手紙の交換という設定で文章を書かせ、それを朗読発表するという授業でした。終わったときは、生徒も私もやっと終わったという感じでした。

もっと手際よく短い時間で力をつけてやれたらいいのにと思いつつ、なかなかできません。授業をつかっていくときに、何をどんなふうに考えて準備すればいいのでしょうか。

A

物語の文章を読ませるときいつも不安になるのは、子どもたちが果たしてこの物語を理解しているだろうかという点です。そのためには、あらずしも押さえる必要はないし、登場人物もつかまなければいけない。文学の授業であるかぎり、物語全体の構成も押さえる必要はない。表現の特色にも気付けなければならぬ。作者の述べたようにした主題も伝えさせて…。それから、初発の感想は必ず書かせなければ…。

考えてみると、私たちは多くの「ねばならない」に縛られています。「縛り」は、その文章を「理解させる」ためにはどうしたらいいのかという発想が導くものです。「理解させる」ことはもちろん大事ですが、その文章でどんな力をつけようとしているのかを考えなければなりません。

授業をつかっていく手順をふまえないから、どんなことを考えていけばいいのかを述べてみたいと思います。

## 自分への問いかけ

相談者の先生が実践した「少年の日の思い出」の授業を流れに沿って再現すると、次のようになるでしょう。

- ①全文を通して読む
- ②初発の感想を書く
- ③意味段落に分けて、どのよう な場面かを押さえる
- ④段落の構成を考える
- ⑤登場人物になりきって手紙を書く
- ⑥朗読の工夫をしながら手紙を 読み合う

これを時数してみると、最低でも八時間、もしかしたら十時間ぐらいかかっているかもしれない。一つの教材をじっくり読み込むことがいかに大変か、はありませぬが、週に三時間か四時間という「こ」を考えると、ひと月近く同じ教材に取り組んでいることになりませぬ。当然、終わってからの感想も当然です。

この実践を見てみると、大きな活動が二つあります。一つは「手紙を書く」という文体交換の活動、もう一つは「朗読発表会」。その前に文章を理解するための作業がいくつか入っていることを考えると、かなり重い単元になっています。全部丁寧に行っていることが負担になり、何のための学習がかかえて見えない状態になっています。このような状態になってしまうのは、先ほど述べた「理解させなければならぬ」という「縛り」があるからだと思います。このような状態にならないためには次のような問いかけをする必要があります。

「この教材で、どんな力をつけようとしているのか。」  
(目標)

「どのくらいこの時数でやるのか。」  
(時数)

「今まで、どんなことを学習してきたか。」  
(学習歴)

「この活動をスムーズに進めていくためには、どのような手引きが必要か。」  
(手引き)

「自分はどんなことをしたいのか。」  
(活動内容)

「つきたい力を実現するのに適切な活動はどのようなものか。」  
(活動選択)

私は単元をつかっていくときに、自分に対してこのような問いかけをしています。このような問いを解決しないまま取り組んでしまうと、教師自身が何のためにこの授業をしているのかという目的を見失ってしまうことになりませぬ。つまり、「焦点化されない授業」、「漫然と進められている授業」になってしまっている。時間がどんどん延びてしまえば、生徒には「またやるの」と言われてしまったらませぬ。真剣にやっているのに子どもたちはほとんど興味をなくしていきます。悲しくなります。

上のような問いかけに答えていく手段として、私は単元の前に必ず「学習の流れ」というプリントを作り、学習の流れと目標を生徒に伝えることにしています（p.16資料1）。単元ごとに指導案を作るのはとても大変ですが、この方法なら生徒にも伝わり、一石二鳥です。

まずは単元名を工夫し、どのような力をつけるためにこの単元を学習するのかを整理します。そして、何時間計画で、どのような活動があるのかを明確にし、学習のイメージが浮かぶようにします。

この「学習の流れ」作りの作業を通して学習全体のシミュレーションをすることが出来ます。そして、このシミュレーションをするときに、どのよう な手引きが必要か、どんなワークシートを作ったらいいのかが見えるようになります。

次のページに示した「学習の流れ」(資料1)は、三年の教材「握手」の単元です。「人物像を伝えられる力をつける」ということを主目的として取り組んだものです。

